

益田平野の地史の検討（概報）

島根県立三瓶自然館 中村 唯史

本報告では、益田平野の地形発達史について、地形解析および表層地質の検討による解析の経過と今後の見通しについて述べる。なお、本調査は、益田市教育委員会および島根県教育委員会の協力で実施している。

益田平野は高津川および益田川の下流部に位置し、島根県では出雲平野、安来平野に次ぐ広さを持つ沖積平野である。当地では、山陰自動車道益田道路の建設が進められており、これに伴って、試錘データおよび埋蔵文化財の発掘調査が継続的に実施され、表層地質に関する資料が蓄積されている。本調査では、これらの解析と微地形解析を行い、益田平野の過去数千年間の自然史を解明することを目的としている。

微地形解析は、大縮尺の地形図（1：1000～1：500）による1mオーダーでの微地形読みとりと空中写真判読を行い、コンター図および旧河道等の微地形区分図として図化した。これによると、沖積面の微地形は、その大半が高津川の営力によって形成されたもので、河川規模の違い（高津川＞益田川）が直接的に影響していることがわかる。なお、ここでは供給河川の判断は地形の方向性から行ったものだが、堆積物から識別する上では、高津川起源の碎屑物のマーカーとして青野山火山群の噴出物が有効であることを、平野部における調査トレンチで確認している。

試錘データについては、益田平野を東西に横断する計画路線に沿う多数の地質柱状図および周辺の既存データ入手し、堆積層序を検討した結果、東西方向における高津川三角州の断面的特徴と、平野東部に海水環境の潟湖が存在することが明らかになった。従来、中世における益田地域の発展と、港湾としての潟湖の関係が指摘されていた。しかし、層序は高津川三角州の成長速度が大変早いことを示しており、潟湖の存在時期や規模は再検討する必要がある。

今後の課題として、地形発達史を時系列に沿って解明し、併せて開発史との関わりを検討する必要がある。そのために、益田市が実施した自然史調査用の試錘コアを用いて、層相解析および¹⁴C年代測定を計画している。あわせて、古絵図等の文献資料による人文科学的な調査との共同により、総合的な検討を行いたい。